

Kinoshita Naoe' s Critique of “Japanese Spirit”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-07-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00062997

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



論文

木下尚江の「大日本魂」批判

原 佑 介*

序論

本稿の主題は、日露戦争期における木下尚江のナショナリズム批判である。海老名弾正が謳う「大日本魂」をめぐって戦時に展開された論争を取り上げ、木下の批判の論理を考察する。「大日本魂」という語自体が示唆するように、日清戦争から日露戦争にかけて勃興した大国主義は、日本を半永久的な対外膨張に駆り立てる原動力となった。その意味で、日本の大国化を寿ぐ海老名の「大日本魂」という言説は、その構造のいびつさも含めて、植民地帝国としての近代日本が形成していった自画像の一個の原形を表わしている。木下や、批判の口火を切った幸徳秋水は、この原形に敏感に反応していた。

この論争を扱った先行研究の中で、米原謙は、木下の国体論批判が近代日本思想史において持つ意義を認め、これを詳しく分析している¹。従来の研究を見るに、総じてこの論争は専ら近代日本思想史上の重要人物とされている木下もしくは吉野作造の思想を読解するという目的意識から注目され、海老名の論については、前置き程度に軽く触れられるのみであった。しかし海老名の論は、むしろ「ほとんど戯言に近い²」ものであるからこそ重要であると見られることもできる。その滑稽さは、ある面では近代日本のナショナリズムが抱えざるを得なかった矛盾の発露であった。また、それが吉野ら一部の年少の知識人たちの支持を得る力を持っていたという事実もある。吉野は日清戦争期を熱烈な愛国少年として過ごしており、強国に metamorphose していく自国の姿を肌で感じながら思想形成を行なった世代に属する³。本稿では、同じキリスト教徒を名乗りながら木下とは本質的に対立する思想家であった海老名の論にも注目し、木下が何者であるかという問題以前に、何者ではなかったかということに浮き彫りにする。

論争の考察に入る前に、戦争終結後の木下の文章に少し触れておきたい。1905年9月5日、ポーツマス条約調印の日、講和に反対する民衆が暴徒化し、東京は騒擾の坩堝に投げこまれる。日比谷焼打事件である⁴。26日、幸徳秋水らを擁し、非戦論の牙城として孤軍奮闘していた平民社がついに解散する。これを受け、11月10日、木下は石川三四郎や阿部磯雄らとともにキリスト教社会主義の雑誌『新紀元』を創刊し、言論活動の拠点を同誌に移す。12月の第2号に、「東洋の革命国」という木下の記事が掲載された。その中で彼は、清国や朝鮮の指導者を任じる国内の風潮に不快感を吐露している。極めて短い断片ではあるが、彼の国家観の特質を表すものとして注目に値する。以下がその全文である。

露西亞の革命が何等の波動を東洋に及ぼすべきやは、吾人が熱心に観察するを要する大問題也、看よ、支那に朝鮮に革命の飛火すべき燃料決して其の乏しきを憂ひざるを、日本の識者往々軽忽にも支那の開発、朝鮮の指導を広言す、知らず、公等果たして何物を有するや⁵

アジアにおける特権者という日本国民の自国像は、近代日本のナショナリズムの柱である。その意味で、日清戦争中に山縣有朋が天皇に上奏した「軍備擴充意見書」の次の主張は、近代日本の対外政策の原点であるといえる。

抑モ従来ノ軍備ハ専ラ主權線ノ維持ヲ以テ本トシタルモノナリ然レトモ今回ノ戦勝ヲシテ其ノ效ヲ空フセシメス進ンテ東洋ノ盟主トナラント欲セハ必スヤ又利益線ノ開張ヲ計ラサル可カラサルナリ然リ而シテ現在ノ兵備ハ以テ今後ノ主權線ヲ維持スルニ足ラス何ソ又其ノ利益線ヲ開張シテ以テ東洋ニ覇タルニ足ル可ケンヤ⁶

キーワード：ナショナリズム、大日本魂、日露戦争、木下尚江、海老名弾正

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2007年度入学 公共領域

「東洋ノ盟主」という自己認識はアジアにおける自国の特権的異質性を前提とするが、山縣は清国をイギリスやロシアと並ぶ「強国」の一員に挙げている。意見書は、諸列強に囲まれた小国の切迫した危機意識に貫かれている。これに対して、日露戦争は、日本が他のアジア諸国と心理的に決別する契機となった。それはまた、国際社会において弱者から強者へと日本国民の自意識が変化していき、対外政策の主題が「主権線」から「利益線」へと完全に移行する上で決定的な転換期となった。後述するように、海老名の論もこの移行の痕跡を濃厚に残している。

不平等条約の撤廃という官民一体の宿願を軸に展開された明治のナショナリズムは、松本三之介によれば二種類に大別される。一方は「忠君愛国」という語に象徴される「上からのナショナリズム」であり、他方は「国民の自発的な国家=集団意識に支えられた」下からのナショナリズムである。後者では、「自主的な国民の集団が他ならぬ国家であるという考え方がとられ、国家への愛情とはそうした集団としての国家と自己との同一化のうえに形成されると観念された⁷」。日露戦争期の木下は、キリスト教と社会主義に基づく非戦論の立場から、この二種類の国家主義双方と対決した。前者のいわば官製国家主義については、教育勅語の解説書『勅語衍義』などを著して天皇制近代国家を後押しした井上哲次郎⁸に代表される教育界の保守思想を「国家偶像の旧思想」と一蹴している。社会秩序壊乱の廉で告発された『平民新聞』の弁護人として法廷に立った木下は、1905年1月東京控訴院において、井上らを「其国家観念は世界を離れ、否な、寧ろ世界を憎悪し、其頑冥不靈の思想を以て、強て日本特有の精粹なりと主張せり⁹」と非難した。

その一方で木下は、後者の国家主義にも同様に批判的であった。日露戦争最中の1905年初頭、海老名を主筆とする本郷教会の機関紙『新人』と、幸徳、木下という社会主義者との間で、国家観をめぐる論争が繰り広げられた。きっかけは、『新人』1月号の巻頭に掲げられた「日本魂の新意義を想ふ」という海老名の社説である。これを幸徳が1月8日付『平民新聞』の「新年雑誌瞥見」において早速批判すると、海老名の論を支持する吉野作造が『新人』2月号の「国家魂とは何ぞや」という論文でこれに応じる。これらを受け、木下は2月12日の『直言』に「国家を議するの好機会¹⁰」として『『新人』の国家宗教」と題する論文を発表し、海老名と吉野を批判した。吉野は『新人』3月号の「木下尚江君に答ふ」で木下に反論するが、直接の応酬はここで途切れた。続く『新人』4月号の「平民社の国家観」で、吉野は木下の応答がないことに不満を漏らし、挑発の言を繰り返しながら記事を結んでいる。このように、「大日本魂」への木下の反論は、直接的には上の一編にとどまる。しかし先に引いたその年の暮れの記事が示すように、大国主義への警戒は、木下の思想において重要な位置を占め続ける。吉野と海老名の差異についていえば、吉野の国家論が松本の定義する下からのナショナリズムにほぼ合致するのに対し、海老名のそれは、キリスト教的要素のふんだけ井上らの国家論とはやや異なるといった程度であり、内実は限りなく「上からのナショナリズム」に近い。

本論に入る前に、筆者の基本的な問題意識について述べておきたい。西川長夫は、国際社会における強者と弱者の依拠する論理の相違を次のように言い表している。

一般に強者の論理は普遍主義の形をとり、それに対抗する弱者の論理は個別主義の形をとる。だがこの関係は一度、弱者が強者に、あるいは強者が弱者に転化すれば、たちまち逆転するだろう。そのことをわれわれは世界史におけるさまざまな征服者と被征服者の歴史によって知ることができるが、より身近には文化=個別主義に固執したドイツ帝国がナチズムをへて普遍主義に転じる歴史によって、あるいは個別主義から出発した日本帝国が日清日露の大戦をへて、やがて大東亜共栄圏を構想し、普遍主義に転じようとした歴史によって知っている¹¹。

筆者の問題意識の核心には、近代日本思想史におけるこの「転化」への関心がある。仮に近代日本の対外政策を根底から突き動かしたものが西洋への劣等感や恐怖感であったとしても、大東亜共栄圏の思想は「強者の論理」であり、それが欧米列強の侵略に対する危機意識に触発された明治初期のナショナリズムと一線を画することは明らかである。だとすれば、この間に断絶を想定することは許されるであろう。

とはいえ、強者と弱者の関係はあくまでも相対的なものである。近代日本の自己認識がいつ実質的に強者の側に転じたのかについては様々な見方がある。あるいはそもそも「転化」そのものがなく、近代日本史はある意味で強

者の自意識を獲得するための終わりのない道であったと見ることもできる。また、酒井直樹が指摘するように、「ある種の地方主義provincialismと普遍主義は同じ硬貨の二面にすぎないのであって、特殊主義と普遍主義は二律排反の関係にあるというよりも、相互に補強するような関係¹²⁾にあるともいえる。すると「弱者の論理」に「強者の論理」が内包されていることになり、したがって両者を截然と区別することはできない。しかし、これらすべてを考慮した上でなお、日露戦争が近代日本のナショナリズムの相貌を左右し続けた「強者の論理」と「弱者の論理」の力学に最も大きな影響を及ぼした画期の一つであったとはいえる。このころから、日本と世界を同じ地平で語る思考が実質的な影響力を持ち始める。

本稿で用いる普遍主義という語について付言しておく。上の引用文に続けて西川は述べる。「ここで普遍性を表わす国際法は普遍性の通用する文明化された世界、つまりは西欧世界という一つの文明にのみ適用されるものであって、文明に対して特殊を表わす未開の世界には適用されない。したがって列強が植民地を所有することはまったく自由であり、国際法には抵触しない。むしろそれには文明化のためにという口実が用意されており、その文明化はしばしば『使命』として認識されたのである」。このように、西川の普遍主義は植民地主義を孕むものとしての批判対象である¹³⁾。海老名は、アジアすなわち「文明に対して特殊を表わす未開の世界」に対する日本の本質的優越を前提にしている。本稿における普遍主義とは、自己を「文明化された世界」の側に置き、場合によっては両者を同一視することさえ辞さない思考態度を指す。木下が信奉していたキリスト教や社会主義は、普遍主義的思想である。しかし、本稿で重要なのは、ある思想が本質的に普遍主義的か否かということではなく、その思想の保持者の思考様式が上述の普遍主義に該当するか否かということである。以上を踏まえ、本論に入る。

海老名は、満を持して「文明化された世界」へと踏みこんでいき、さらにその世界を変革せんとさえる日本を祝福したのであった。過熱報道が国民の愛国心を煽りたてる中¹⁴⁾で書かれた「日本魂の新意義を想ふ」は、西川のいう個別主義から普遍主義への転化の興奮を伝える好例である。海老名自身が「上天は此大日本魂を指導し啓発して今や如何なる転化をなさしめんとしつゝあるか¹⁵⁾」と問うている。この「転化」の瞬間を切り取ろうとした海老名の論を、開戦前に「古来人類の最大迷信は即ち国家崇拜なり¹⁶⁾」と喝破していた木下はどのように受け止めたのだろうか。

1 「国家魂」の「世界魂」への転化——海老名弾正「日本魂の新意義を想ふ」

開戦一年を迎えようとしていた1905年1月、『新人』は海老名弾正の社説「日本魂の新意義を想ふ」を劈頭に掲載した。海老名は、個人としての「仏陀」や「聖人」、「神子」は世界史上に稀有ながら存在したが、それらを体現する国家はいまだ例を見出すことができない、と論を説き起こす。そのような中、他ならぬ「大日本魂がロゴスの化身となり、大日本帝国が神の国と靈化すべき」であると謳い、「神子帝国」の実現こそが日本に課せられた世界的使命であるという持論を展開していく。彼は諸新聞が競って描く新興日本の英姿に力を得て、その使命の質的変化を指摘する。

日本魂は由来国家魂なりき、今や大進して世界魂たらんとす。日本魂は由来民族魂なりき、今や大転して人類魂たらんとす。

日本の民族精神が世界性を帯び始めたという主題の根拠となるのは、ひとえにその国力の隆盛である。「試に去年の此頃の事を回想せよ。何人も露国東洋艦隊が池上の鴨の如く追ひ廻され射撃せらるゝを想像し得たりしものはあらざるべし。何人も日本兵が斯くまで連戦連勝して、今や方に五十万の露兵と沙河に^{まき}対陣するを想像し得たりしものはあらざるべし」。このように海老名は、仇敵ロシアとの戦いを痛快に論じ、一国民の興奮を燃え立たせる。

「誰れか大胆にも此日本魂の旺盛を予言し得たりしぞ」と彼は問う。「吾人は彼等が見んと欲することも得ざりしものを見、彼等が聞かんと欲することも得ざりしものを聞くなり」、「彼等小楠の如き又東湖の如きは予言者中の最大なるものなりと雖も、しかも現代の最小なるものにも及ばざること甚だ遠し」。このように彼は、「日本魂」の「大進化」をキリストの降臨と重ね合わせる¹⁷⁾。

こうした海老名のみ具合とは対照的に、幸徳秋水は彼の「壯快なる議論」を次のように引用しながら、軽妙にその論を冷やかしていく。「大日本魂（氏は日本魂と云はずして大日本魂と云ふ）は不可思議なる国家魂なり、日本民族は皆此魂に指導せられ啓発せられ、偉人も豪傑も皆此魂の指導に依りて偉人たり豪傑たるものにして、此大日本魂は正しく帝国を指導する火の柱、雲の柱なり、而して之を指導する者は即ち皇天上帝なり、決して人にはあらざるなり¹⁸⁾」

海老名は、世界には「世界魂」を内に秘めた大国家とそうでない国家の二種が存在するという。彼によれば、「世界魂の種子を有する国家魂」を持たない国家は、発展はおろか生存すら危うい一方で、「大日本魂」は今や戦争の目的をもそれにふさわしいものへと格上げしつつある。

吾人は聞く、日露戦争は日本人より観れば、国家自衛の戦争なりと。然り、固より然あるべきことなり。然りと雖も此魂が血の洗礼を受け領したる暁は如何。吾人は信ず、最早国家自衛の標語を再びせざるべし。爾来此大日本魂は世界平和、少くとも東洋文化を以て其旗幟となし、其主眼となし、其動機となすに至るや智者を待て始めて知るべきにあらず、蓋し国家其もの、保全は最早氣遣ふ要なればなり。

こうして、日本の対外拡張の大義が「国家自衛」から「世界平和」、「東洋文化」へと変容する。海老名は、「強者の論理」に向かって今まさに飛躍しようとしている「弱者の論理」の離陸の瞬間に立ち会う感動を国民と共有しようとしていた。ここで現れているのは、大東亜共栄圏の論理の原形である。とはいえ、1941年12月の「宣戦の詔書」に至っても、戦争突入の理由を「東亜安定ニ関スル帝国積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ帰シ帝国ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝国ハ今ヤ自存自衛ノ為蹶然起ツテ一切ノ障碍ヲ破砕スルノ外ナキナリ¹⁹⁾」と説明しているように、「自存自衛」という「弱者の論理」と「東亜安定」という「強者の論理」の間には、必ずしも本質的な断絶があるわけではない。日本の国家主義においては、第二次世界大戦に至るまで一貫して「利益線」が「主権線」と密接に結びついていた。国家を守るという個別主義の大義は、地域や世界の平和といった普遍主義の大義を纏った侵略性と地続きの論理であるということを、海老名の論は示唆している。

さて、「国家魂」と同様、「民族魂」にも偉大なものとそうでないものがある、と海老名は続ける。「人類魂なきの民族は決して永存すべき実質を有せざるあり」とする彼は、「アングロサクソン民族は今や北米の天地ミシシッピー河の氾濫する原野に於て欧洲諸民族の融化を期しつゝあり。日本民族は爾来満韓の天地遼河の氾濫する平野に於て、東洋民族の融化を遂行し能はざらんとするか」と、アメリカと日本を東西それぞれの「大国家魂」の所有者として並立させる。ここには石原莞爾の最終戦争論へとつながる東西文明の二大王者という発想が見られる。さらに彼は次のように述べ、「強者の論理」への転化の志向を一層あらわにする。

苟も人類魂いやくの実質を有するあらんか、そが東洋民族を融化して、之に此大日本魂を吹き込んこと何ぞ難事とせんや。此時に当て日本魂は公明正大なる博愛主義を標榜して、東洋の天地に其旺盛を極めんこと吾人疑はんと欲して猶疑ふこと能はざる所。

ここで海老名は、アメリカにおいてヨーロッパ各国からの移民がイギリス化したように、「東洋民族」もまた日本化すべきであるという主張に至る。幸徳は、「斯くて氏の説に依れば、大日本魂なる者が将来の発展は東洋諸民族を併呑して其旺盛を極め、露人も之に融化され、欧米民族も之に抵抗する能はざるに至るべき趣きなり」と、敢えて「併呑」という語を用いて海老名を批判した。

幸徳は前年の7月17日、「朝鮮併呑論を評す」という論文を『平民新聞』に載せ、海老名の「朝鮮民族の運命を觀じて日韓合同説を奨説す」（『新人』7月号社説）を、徳富蘇峰の「韓国経営の実行」（『国民新聞』社説、7月8日）および「韓国経営と実力」（同、12日）と併せて批判している。ここでも彼は、海老名の「合同説」を「併呑論」と言い直した上で「保護國は不可也、属國は不可也、而も只『合同』と称すれば甚だ可也、合同乎、合併乎、併呑乎」とその欺瞞を突き、また徳富の論を「嗚呼『韓国の領土保全』乎、『独立扶植』の警語は何時の間にやら消え失せたるこそ笑止なれ」と嘲った。彼らを「法衣を着たる狼」と一喝する幸徳は、その排外主義とアジア蔑視を「日本民

族が如何に異民族に悪感を懐き居るかは、彼れが謂ゆる新平民に対することにても明白也、日本人が如何に韓人を軽蔑し虐待せるかは、心ある者の常に憤慨せる所に非ずや、韓人が日本人と合同せんとする事あらば、そは合同に非ずして併呑也」と、またその大国主義を「見よ、領土保全と称するも、合同と称するも、其結果は只ヨリ大なる日本帝国を作るに過ぎざることを」と激しく非難した²⁰。

さて、海老名の論の結論部分では、「吾人は此日本魂が必然宇宙魂に其本源を深うするを承認せざるを得ず。其本源深からずして此の如く末栄ふるものは吾人未だ之を聞かず」と、日本の繁栄の原因を即「天地の公道」の保持という大仰な理由に求め、かつまた当然生じるべき欧米列強の繁栄の原因を等閑視するなど、論理の飛躍が甚だしくなってくる。最後に彼は、ながく個人単位でしか顕現しなかった「宇宙魂＝ロゴス」の民族単位の体现者として、「大日本魂」に「渾然たる大慈悲心となり、大博愛心となりて億兆に臨み万国を照らす」という世界的使命の自覚を要求する²¹。幸徳秋水の筆は、この結論部分をちやかす段になって冴え渡る。

嗚呼是れ純乎たる本地垂迹説に非ずや、吾人は古への大宗教家より天照皇大神が大日如来の権化なりしことを聞けり、驚くに堪たり、今の大宗教家の口より亦日本魂がロゴスの顕現なるの説を聞かんとは、然れども是れ宗教家としては実に巧妙なる説教也、若し進んで東郷大将は是れ基督の権化なりと言はゞ更に巧妙なるべきにあらずや、而して本地垂迹説の結論は当然国家無上、国家万能の主義に到達す

このように幸徳は、「本地垂迹説」という宗教用語を当てはめることで海老名の思想の非科学性と陳腐さを強調して、それが宗教の国家権力への癒着という現状を露呈し、元来非国家主義たるべきキリスト教の本義から逸脱していることを皮肉った。また、「大日本魂」が「ロゴス」の化身であると言うならば、いっそのこと東郷はキリストの再来だと言ってしまえ、と大真面目な海老名をからかっている。

海老名の「朝鮮民族の運命を觀じて日韓合同説を奨説す」と「日本魂の新意義を想ふ」に対する幸徳のそれぞれの批判を比較してみると、その筆致にかなりの温度差があることがわかる。彼は、帝国主義肯定論である前者に対しては、正面から激烈な怒りをぶつけたが、後者には嘲笑で応えるのみであった。この態度からは、木下が明治20年代初頭の井上らの君主神権論を前時代的な「国家偶像の旧思想」であると一蹴するのと同じ、幸徳の平衡感覚がにじみ出ている。

三宅雪嶺は『明治思想小史』（1913年）において社会主義に触れ、日露戦争期の思想潮流の変化を次のように回想している。「併し温和なもの許り行はれる訳にゆかず、少数ながら国家社会主義に反対し、民主社会主義とも云ふべきを唱へたのがある。其の人を見れば貧にして言ふに足らず、其の為す所も僅かばかりの小冊誌を刊行するに過ぎぬが、世間を騒がしたこと少くない。三十七八年役まで左程注意を惹かず、書生の悪戯位に考へられたが、戦役の為に国威が揚り、強国の仲間入りし国家として大に誇るべき位置に上つたと同時に一国を標準とせず、世界を標準とし、世界に於ける人類として如何にするが最も幸福なるかを考ふる傾向を生じた²²。」続けて三宅は、この世界主義の出現についてさらに述べる。

世界の強国と戦ひ之に勝つては、觀察の範囲が頓に広くなり、動もすれば東西南北を一目に見るやうな感じをする。日本は世界を相手とすると云ふ半面、日本のみが国でない、日本が厭ならば何処へでも往くが宜いと云ふことになり、曩に自由民権を唱へたのは国家内に自由を求めたのである、国家が世界に打つて出た上は更に世界に自由を求むべきであるとするのがある。

三宅は、民族の独立という国家課題が一応の解決を見た日清日露戦争後、その課題をめぐってせめぎ合ってきた国家主義と非国家主義が、対立しながらそれぞれの形で世界主義化していったという。これは、一方では海老名のような大国主義へと、他方では社会主義、無政府主義、あるいはキリスト教的四海同胞主義へと結実していく。三宅が「半面」と言うように、相容れない両者の思想が表裏を成しながら時を同じくして台頭してくる背景には、世界という舞台が日本国民の視野に入りつつあった時代の流れがある。このように日露戦争は、日本はどのように世界と関わっていくべきかという新しい課題が思想化する契機となった。「大日本魂」をめぐる論争は、このような国

家と世界の関係を問うダイナミズムの中で展開された。

2 「国家魂」の「国民的基礎」——吉野作造「国家魂とは何ぞや」

幸徳秋水の批判に答えたのは、当時大学院生だった吉野作造である。『新人』2月号の「国家魂とは何ぞや」で、彼は幸徳秋水を「国家といひ国権といふの語辞につき正当穩健なる見解を有せざる者²³」と非難した。彼は海老名の「国家魂」を以下のような説明で補強する。「抑^{そもそも}人類はもと孤棲するを得ず、個人の物質上並びに精神上の生活は決して社会国家を離れて存在するものに非ず。即ち個人は皆社会国家なる団体の一員として常に其団体の意思に統制指導せらるゝものなり。この各個人の内外一切の生活の最上の規範たる『団体の意思』を国家精神又は国家魂と云ふ。」

吉野はこの、各個人の「独立自由の意思」と「団体の意思」の関係、「不羈独立と束縛」という本来相容れない緊張関係にある両者の力学が国家の政治形態となって表れると考えた。その上で、近代においては「各個人は^{ただ}管に受動的に国家精神の統御に服するものたるのみならず、又よく自動的に国家魂を作るものと云はざるべからず」と、彼は松本三之介のいう「国民の自発的な国家＝集団意識に支えられた」、国民の能動性に裏打ちされた国家主義を主張した。各個人の主体性が「国家魂」との関係において最もよく発揮されるのが「近世文明国」である、と吉野はいう。当時専攻していたヘーゲルの説を踏襲し、「古代蒙昧の時代」において「君主は直ちに国家其もの」であったのが、貴族政治の時代を経て近代に至り、「国家は茲に始めて国民的基礎の上に立つことを得るに」至ったとする。

これを踏まえて吉野が下す次のような結論は、社会主義者木下には到底納得できるものではなかった。「故に現今の論壇に於て国家魂を目して君主若しくは貴族の声なりと為す者あらば是れ甚しき誣妄^{ふぼう}の言たり。君主貴族の声が直ちに吾人最上の規範たりし時代は既に遠き昔の夢となりぬ。」この点に関して、木下と吉野の見解は真向から対立している。

また吉野は、「国家魂」と個人の関係が常に抑圧の関係であると考えるのは誤りであるとし、「蓋し国家魂の各国臣民に臨むや、独り各人の行為に対する外部的規範として服従を迫るのみならず、又一種の精神的規範として各人の意思動念の實質たらんとすることを要請するもの也」と述べる。彼の考えは、「国家精神の個人に於ける完全なる顕現、換言すれば個人的意思の国家魂に迄の活発なる向上は国家最上の理想にして、個人の意思と国家の精神との乖離は実に国家の生存に取りて一大不祥事たり」というものであった。ここから、次のような結論が導き出されることになる。

若し個人にして未だ国家魂を体認せざるものあらんか、即ち国家は徐々に斯かる個人を同化するに務むべきと同時に、国家存立上当面の急務としては先づ非国家魂の意思に基きて顕れたる「行為」を排斥打破することを怠るべからず。

こうして吉野は、「国家存立」という個別主義的大義から、幸徳らの「非国家魂の意思」を排撃しようとする。この国内統治の論理は、すでに見た海老名の「大日本魂」による「東洋民族」の「融化」という普遍主義へとなかば不可避免的に発展していくものであろう。「非国家魂の意思」へのこのような敵意の存在は、吉野の国家哲学においても個別主義と普遍主義が補完関係にあったことを示唆している。「国家魂」が各個人の「非国家魂の意思」の「同化」および「排斥」に努めなければならないとする以上、「今こゝに各個人の上に在りて之を統御する一大意力ありとすれば、そは必ずや各個人共通の意思に其根柢^{こんたい}を有せざるべからざるや弁明を待たず」と彼が言う時の「各個人共通の意思」は、「国家精神の統御」の範囲内を決して逸脱しない限りにおいてしか成立し得ない。したがって、海老名の論は畢竟「国家無上、国家万能の主義」に過ぎないとする幸徳の批判は、あたかも「国家魂」が「各個人共通の意思」を基に形成されてきたかのように論じる海老名の論理倒錯を突いている点を顧みて、正当なものであるといえよう。「各個人共通の意思」が「国家魂」を形成するのではなく、むしろ逆にまず「国家魂」ありきで、「個人」の「同化」と「非国家魂の意思」の「排斥打破」という手続きを経る中で制限的に「各個人共通の意思」が形成されていく。吉野の国家論は、彼自身の意志に反し、そのような結論にたどり着く構造を持っているように思われる。

吉野はさらに、「国家魂」と「主権者」とは区別しなければならない、という。「所謂国家の権力とは国家魂が各人の行為を強制する外部的勢力として発現せる場合を指して之を云ふもの也。〔……〕この国家の権力の通過する個人又は個人団体を主権者と云ふ」。「主権者」は、「国家の権力」を着実に行使する限りにおいてそうある権利を有する、したがって「夫の国家魂は単に臣民を統制する規範たるのみならず、また実に主権者をも指導するの活力なり」と彼はいう。しかし「主権者」の「国家の権力」濫用の可能性についての考察は一切ないため、論理を追う限り両者の区別は彼が述べるほど明確ではなく、また「国家魂」の「主権者」に対する優位が確保されているとはいえない。そのため、「然るに世往々国家と主権者との観念を混同し、国家に謳歌するを以て徒に君長に阿諛する所以と做す者あるは頗る怪むに堪えたり」と暗に幸徳らを批判するが、これには説得力がない。

3 思考単位としての「個人」と「国家」——木下尚江『『新人』の国家宗教』

1905年2月、木下尚江は週刊『平民新聞』の後継紙『直言』に『『新人』の国家宗教』を発表した。彼はまず海老名弾正らの「国家的基督教」が説く「東洋の伝道」、「国家の尊重」の物言いが、「東洋の平和」、「国家の膨張」という政治思想に回収されているとし、国家と宗教の癒着の現状を批判した。次いで吉野作造を相手どり、「国家は終局の目的に非ず」として「国家魂」の批判に着手する。

木下は吉野の「国家魂」に対する国民の能動性という「民主、義」的「理想」については同意した上で、「国家の権力」を行使する「主権者」の権利の絶対性を否定した吉野の「進歩せる国家の哲理的理解」が、実際には「日本国民の一般感情」と対立するものであると指摘する。「看よ、日本帝国に於ける主権の基礎を何処に置くべきやは、現に愛国的法学者の苦心焦慮する最大問題に非ずや、『新人』の秀才は平然として言はん、『各個人共通の意思』と、然れ共彼等愛国的法学者は正に記者の言に戦慄すべきなり、而して之を『祖先教』の旧信仰に求めて、始めて僅に意を安んじたり。」このように木下は、吉野の国家哲学に対して概ね理解を示しており、その非現実性を指摘したにとどまる。

木下が問題としたのは、近代においては「国家魂」と「各個人共通の意思」が調和の段階に達しているとし、「政府及び有権者が国民の旧信仰を煽動して自家便宜の政略に充つる」現状に対して吉野が無批判である点であった。木下は近代国家が国民の「共通意思」を基礎として成り立っているとする吉野の見解に疑義を呈した。「文明の結果は同胞の間を割きて貧富両民族に分類せんとするの傾勢日に益甚し、何の処にか『共通意思』を基礎とせる国家の理想は実現せらるゝや」と、木下は社会主義の見地からこれを否定する。「民族」のこのような用語法は、「日本民族」という語を連呼する海老名の論では考えられない。人間集団を国家単位で捉える認識のあり方に違和感を覚えていた木下の思考様式の一部が窺える。

吉野はこれに対して、「凡ての個人が全然同一の意見を有するに至らざれば共通意思に基づく国家と云ふ能はずとする乎。抑も現時の国家に於て共通意思の実現が完全に非るや固より論を待たず。〔……〕貧者と富者と一方に相争ふと同時に他方には日本人としての独特なる共通意識なしと云ふ乎²⁴」と反論している。ここで吉野は二つの観点から木下に疑問を投げかけているが、前者は特に木下の批判の急所を突いている。仮に木下の「宿論たる民主、義」が完全に達成された場合、吉野のいう「各個人の内外一切の生活の最上の規範たる『団体の意思』」は存在の最低条件を満たし、したがって論理的には「国家魂」への道は木下においても開かれていることになる。民主主義が国家主義と必ずしも相容れないものではないということをどう考えるかは重要な問題である。とはいえ木下は、「共通意思」に基づく国家は必ず国家主義を乗り越え、「人類の『共通意思』」と調和するはずだと単純に楽観していたわけではなかった。

「各個人共通の意思」に対する木下の態度は複雑である。彼は日本における普通選挙運動の先駆者であったが、議会主義の万能性には疑問を抱いていた。この民主主義をめぐる煩悶は、1906年9月に木下が社会主義運動から離脱する大きな要因となる。同志たちへの決別の書「旧友諸君に告ぐ」で、木下は普通選挙運動に奔走した過去を回顧している²⁵。ここで彼は、議会主義に対する錯綜した心情を次のように吐露した。

然れども僕は此の如き間に於ても又た常に一個の疑惑に苦しみたり、「議会の効能果して如何？」僕は諸君と

共に階級闘争の刻々に切迫する世界共通の形勢に憤激せざることを能はざりき、僕は議會を以て必ずしも全然不必要なりと言わず、然れども殆ど急頓直下の勢を以て迫り来る物質的文明の圧力を考へ、其の前途を想見する時に及びては、僕は十分に議會の効能を疑はざるを得ざりしなり。

『新人』との論争の時点では、木下はここまで明確に議會主義への疑問を表明してはいない。したがって、本人の回想を根拠にして彼が当時すでに「『共通意思』を基礎とせる国家の理想」そのものへの疑問を念頭に置いていたかのように読むことはできない。吉野の「君主貴族の意思を超越したる一大民族的精神」の宣揚に対する木下の批判は根本的な反論となり得ていないと判断するほうが妥当である。「『新人』の国家宗教」において、木下が「各個人の共通意思」に基づく「国家の理想」自体を否定してないからである。

吉野はいう。「民族の偉大なる」と否とは此国家魂の偉大なる」と否とに係る。然らば吾人は帝国の精神的文明の爲めに敢て国家魂の發展を慮らざるを得ず。又国家の強弱治乱は国家魂と個人的意思との関係の疎密によりて分かる。然らば吾人は主権者をして其拠る所を知らしめ民衆をして其則る所を悟らしめんが爲めに敢て国家魂の意義を明瞭にせざるべからず」。どれだけ本人が精神性を強調しようとも、ここで彼がいう「民族の偉大」さや「国家の強弱治乱」が、帝国主義時代の民族、国家の腕力を指標とする極めて政治性の強い価値に依拠していることは明らかである。しかしたとえそうであったとしても、「国家魂と個人的意思との関係の疎密」がその国家の価値の指標であるとする吉野の国家哲学に同意した以上、木下の批判は「国家魂」を根底から突き崩す力を持ち得ない。

さて、また木下は、「国家の理想」より優先されるべき「人類の『共通意思』」は、国家同士が相争う帝国主義時代の国際社会においては成立しないと指摘した。「人類」を組みこむ思考様式は、「基督教の理想は最初より人類同胞てふ『共通意思』の至極」にあるとするキリスト教理解に基づいている。このような見地からは、海老名の国家主義的キリスト教は矛盾以外の何物でもなかった。

次に木下は「国家宗教の根本的誤謬」として、海老名の論の批判にとりかかる。「英氣颯爽誠に古予言者の余韻あり」とちゃかして始めるあたり、幸徳の海老名批判と態度を同じくしている。木下は海老名の国家観の本質を次のように批判した。

不幸にして海老名君は日本を説くに「人」を単位とせずして「国家」を単位とせり、爰に於てか「国家」をして「世界」に發展せしめんと欲せば是非共戦争征伐の途に依らざるべからざるの結論に到達す

個人の集合体として社会を捉えようとする姿勢は、木下の思考様式を終始貫いていた。東京専門学校に在学中の1887年に書いた「婦人ノ生涯」という論文で、彼はすでに「一国ハ家族ノ団合ニアラスシテ各個人ノ集結ナリ²⁶」と述べている。

「人」が「世界」に至るための架け橋として「国家」を措定すべきか否か。これが、海老名や吉野と木下が最も鋭く対立する問題である。海老名は、吉野のいう「民族的精神」を一個の単位として見なすが故に、「神子帝国の実現」が可能であるという結論に到達する。これに対し、木下は次のような説明で「国家」を否定する。

個人は神子たるを得、爾かも国家は能はず、其故何ぞや、社会的大意思は元と各個人の心裡に包蔵せらる、或は現はれて『家庭』となり、膨張して『国家』となり、更に發展して『世界』となり『四海同胞』となる、故に理性感情の開展發育極めて高朗熱烈なるものは、以て『神子』の品性を実現すべし、耶蘇の如き、釈迦の如き即ち是れ也、然れ共『国家』なるものは社会的意思の發展史に於ける中途の段階にして、神子仏陀の大品性を実現し得べからざるは元とより其所なり

この説明を展開する木下の筆は鈍いと言わざるを得ない。彼は「社会的大意思」は「個人」から「家庭」、「国家」を経て「世界」へと發展していくと認めた上で、国家が「神子仏陀の大品性」を実現できないのは、それが「社会的意思の發展史に於ける中途の段階」であるからだとする。吉野はこれに「最も非論理を極めたるもの也」と嘯みつき、「社会的大意思が一民族を同化することなくして直ちに四海同胞に発現することを得るか」と問うた。確かに

木下の説明は、吉野の「社会的大意思は先づ個人に於て完成せらる。個人化せられたる社会的意思は其精神的威力を逞しうして近親を化しやがて家庭を同化す。家庭は必然に民族を同化し民族は更に四海を同化せずんば止まず。是れ必然の勢力也」という主張に対する有効な反論とはなっていない。

ただ木下は「神子仏陀の大品性に到達せる耶蘇釈迦の如きが最初より『愛国』の羈絆を脱却したる所以亦た知るべきに非ずや」、「世界魂は是れ人類共通意思の到達せずんば已まざるべき目的なり、是れ国家魂の中に潜伏し居るに非ずして各個人の魂中に最初より包蔵せらる所のもの」と述べ、個人と世界は直接つながっていることを強調した。

結論

吉野と木下の議論の食い違いは、一つには木下自身が国家は「社会的意思の発展史に於ける中途の段階」であると中途半端な譲歩の構えを示しているため、吉野の国家主義を逆に勢いづける結果となったことで生じた。国家が最終目的でないことは国家を完全に否定する理由にはならない、と吉野は木下に反駁し、「家庭を重んずるは国家を軽んずる所以に非ざるが如く真に国家を重んずるは決して四海同胞の大義と悖るものに非る也」、「我等は個人的救済と共に国家精神の指導もまた最も高尚なる事業なるを信じ、而して従来我国の国家魂は恐らくは広大なる宇宙魂に其根底を有するが如く感じられしを以て益々此国家魂の開発指導に任ぜんと欲するのみ」と主張する。

木下の反論の要点は、思考単位としての「人」の延長線上に「国家」を置くことが果たして妥当なのかどうかであるはずであった。吉野は「基督教は超国家主義と云ふべくも決して非国家主義といふべからず」と主張するが、木下は「基督教の理想は最初より人類同胞てふ『共通意思』の至極に在」とし、キリスト教の非国家主義を強調した。したがって、「神子仏陀の大品性」が国家において実現し得ないのは、それが「社会的意思の発展史に於ける中途の段階」であるからではなく、「国家自身の本来として到底成す能はざる所」であるからであった。この個人の「神子仏陀の大品性」、あるいは「人類共通意思」と本質的に相容れない「国家自身の本来」について木下が詳細に論究していけば、議論はより深まっていったように思われる。上述のとおり、「記者〔吉野〕と吾人と一致する『共通意思の国家基礎』論」への信頼は、わずか一年のうちに木下を沈黙へと誘う要因の一つとなった議会主義に対する不信と対立する。木下の国家主義批判は、この民主主義への希望と絶望が闘ぎ合う地平で展開された。

すでに述べたとおり、「国家の強弱治乱は国家魂と個人的意思との関係の疎密によりて分かる」とする吉野の国家哲学は、「国家魂」という用語の妥当性あるいは国家の価値を何に置くかについて意見の相違が生じることはあり得るにしても、木下の同意を概ね得られるものであった。しかし吉野が「国家魂」とは「各個人の共通意思」に基礎づけられた「団体の意思」とであると定義していることから、木下の「国家魂」批判の力点は、この「各個人の共通意思」という前提の是非にこそ置かれるべきであった。しかしそれは、木下自身が「宿論」と呼ぶ民主主義の否定の可能性を孕む重大な問いである。その追究が彼にとって相当な困難を伴うものであったことは推察できる。本稿でたどってきた木下の国家主義批判の揺れは、国家主義と民主主義の関係をどう捉えるかという難題の存在を示唆している。

吉野は、思考単位としての「個人」と「国家」を論じ分けて海老名を批判した木下の文章を引用し、「吾人もし国家の発展を主張したりとせばそは靈化したる国家精神の発展なるのみ。高貴なる帝国の精神を世界に発展せしむるに戦争征伐何の要ぞ」と、「国家精神の発展」にとって「戦争征伐」は必要ないと断言し、さらに「海老名主筆が木下君と共に非戦論を主張せざるは恐らくは別個の論拠あらん。茲に戦争論を引き出すは寧ろ滑稽に近からずや」と、「国家魂」の発展と戦争を結びつけて批判する木下に反論した。しかし事実、海老名の「大日本魂」の世界化という議論の根拠は日本の対外的躍進にあり、大国主義の政治性と密接につながっていたことはすでに見たとおりである。海老名の「大日本魂」が主戦論と無関係であったとは到底いえない。山室信一は、「靈化したる国家精神の発展」という装飾で侵略の現実を繕おうとする彼らを鋭く批判している。

〔彼らの論で〕主張されていることは、あくまで威力などを用いない方法による“魂”の日本への同化であった。しかし、視点を変えてみれば、いかに善意や好意に発していたとしても、ここには“魂”という根源的な

ものさえ日本への同化が可能だという、異文化への不感症ゆえの恐るべきオプティミズムが潜んでいたことも疑いない²⁷。

なぜ「人」ではなく「国家」を単位として「世界」を考え、「国家」を「世界」に発展させようとする志向が「強者の論理」たる普遍主義とつながるのか。それは「国家自身の本来」と深く関係しているはずである。この国家の本質に関する議論は、『『新人』の国家宗教』では十分に追究されたとはいえない。近代天皇制国民国家の最も先鋭な反逆者とも呼ばれる木下尚江は、国家の本質をどのように捉えた上でこれを批判したのか。また、「日本を説くに『人』を単位と」するとは、どのような思考態度を指すものなのか。本稿で取り上げた論争は、そのごく一部を示すものに過ぎない。彼はその他にも多くの論文や演説で国家主義批判を展開している。たとえば1908年3月、木下は朝鮮併合の動きを批判して、次のように「掠奪は国家の本性だ」と断言した。

国家が掠奪をするのに何の不思議があるか、之を万国の歴史に尋ねて見よ、政治学者に聴いて見よ、進化論者に聴いて見よ、掠奪の無い所にも人類はある、然しながら国家は無い、国家は掠奪の化成だ、掠奪の結果たる国家が、更に掠奪の原因となり、機関となり、斯くて詐欺闘争悲鳴流血は寸時も地上に絶えないのだ、去れど国家は此の悪業の爲めに左まで胸を痛めるに及ばない、大学の博士達は宇宙の智識を集め来つて熱心に弁護して呉れるでは無いか、

『生存競争、生物の天則』

去れば我が日本よ、朝鮮を掠奪したことを、赤面して弁解するには及ばない、汝の同盟国たる英国も、汝の商約国たる仏国も、汝の友邦たる独逸も亜米利加も、皆な一等の掠奪者である、掠奪は国家の本性だ、「朝鮮の掠奪」を恥づるよりも、寧ろ「朝鮮の独立」を宣言した曩日の偽善を恥ぢよ²⁸

思想家の国家観には、歴史の方向性をどう捉えるかが深く関わっている。海老名は歴史をまさに「生存競争」と認識し、その上に強者たるべき国家像を描いた。一方の木下の国家主義批判は、かつて徳富蘇峰の「新日本之青年」が夢見た楽観的な未来をあくまでも信じ続けようとする歴史観に支えられていた。彼は自身の思想形成に大きく寄与したその歴史観に固執し、永遠の「新日本之青年」として「掠奪」の時代の終焉にふさわしい国家像を模索し続けた。しかしすでに近代日本の歴史は、徳富の主張の変化にも表れているように、確実に「新日本」から「大日本」の時代へと移行しつつあった。海老名が謳った「大日本魂」は、そのような巨大な転換期の産物である。この歴史の奔流の只中であって、最も激しくこれに抗ったのが、幸徳秋水であり、また木下尚江であった。

注

- 1 論争の概観にあたり、田中惣五郎『吉野作造』（三一書房、一九七一年）の第二章特に第三節、『吉野作造選集』第一巻（岩波書店、一九九五年）の清水靖久による解説「吉野作造の政治学と国家観」特に第一節、清水靖久『野生の信徒 木下尚江』（九州大学出版会、二〇〇二年）の第四章特に『『新人』の国家宗教』の項、米原謙『近代日本のアイデンティティと政治』（ミネルヴァ書房、二〇〇七年）の第一章特に第三節および第四節、同『日本政治思想』（ミネルヴァ書房、二〇〇七年）の第六章特に第一節を参考とした。
 - 2 米原謙『日本政治思想』（ミネルヴァ書房、二〇〇七年）一四九頁。
 - 3 田澤晴子『吉野作造』（ミネルヴァ書房、二〇〇六年）二五頁参照。
 - 4 大混乱を目撃した木下は、その本質を次のように要約している。「冷淡な政府、熱狂の愛国者『怨恨憤怒』の国民、此の危険なる三者の関係は『敵国外患』の一語の下に辛ふじて彌縫されて来たのであつたが、戦争愈々終結と確定したので、俄然として爆裂して仕舞つたのだ、愛国者は『屈辱の平和』を絶叫して最後の狂熱を振ふのである、言ふすべ知らぬ一般国民は只だワアワアと云ふ叫喚の奥に、一切の憤怒怨恨を燃やして、冷淡なる政府に復讐を試みた。（『日かげの女王』（のちに単行本『飢渴』所収に当たって「隣家の美人」と改題）、『新紀元』、1906/02/10、『木下尚江全集』第四巻（教文館、一九九四年）一六二—一六五頁）」
- 以下、本稿で引用する木下らの文章の脚注には、執筆者名、論文の題名、初出の新聞・雑誌等の名称、初出年月日、引用した本、ページ数の順に記す。なお、本稿で引用した日露戦争期の文章は、旧字体を改めた箇所がある。引用文のふりがなは原則として原典に従った。同一の論文から複数回にわたって引用した場合、煩雑化を避けるため、最初の引用文以外は脚注を省くこととした。
- 5 木下尚江『東洋の革命国』、『新紀元』、1905/12、『木下尚江全集』第四巻、二四七頁。

6 大山梓編『山縣有朋意見書』（原書房、一九六六年）二三一頁。

7 松本三之介『明治精神の構造』（岩波書店、一九九三年）一四—一九頁。

8 井上哲次郎は、木下が終生最も嫌悪し軽蔑した思想家であった。木下は、最晩年の回想録『神 人間 自由』で、井上に対する激しい侮蔑感を吐露している。

「大隈の條約問題の時、井上哲次郎と云ふ大学の哲学教授が、独逸の留学から帰つて来た。それから直ぐに『内地雑居論』と云ふ小冊子を発売した。西洋人に内地雑居を許せば、日本民族は消滅してしまふと云ふ議論だ。井上と云ふ男が真に然う信じて書いたのか否かは知らぬが、此の変装した攘夷論が馬鹿に勃興しかけた保守的心理に投合した。

一、二十三年十月九日、議會召集令が出て、十一月廿五日を以て愈々多年の民望たる国会が始めて開かれることになつた。

一、同三十日、教育勅語。

すると、井上が又た『宗教と教育の衝突』と云ふものを書いた。基督教は教育勅語と衝突するから容赦すべきもので無いと云ふのだ。『切支丹禁制』の復活だ。凡そ明治時代の文章で、此の井上の『宗教と教育の衝突』ほど粗末なもの無かつた。而かも是れほど珍重がられたものも無かつた。日本全地『神道』と『仏教』に関する雑誌で、此の井上の衝突論を護符の如くに転載せぬものは無かつたらう。（木下尚江「自由主義者・島田三郎」（のちに単行本『神 人間 自由』（中央公論社、一九三四年）所収に当たって「自由の使徒・島田三郎」と改題）、『中央公論』五月号、1933/05、『木下尚江全集』第一一巻、八二頁）

9 木下尚江「朝憲紊乱とは何ぞ」、『平民新聞』62号、1905/01/15、『木下尚江全集』第一七巻、一三頁。

井上は『勅語衍義』の序文において、「孝悌忠信」と「共同愛國」の二本柱を「国民的教育ノ基礎」としなければならぬと説いた上で、両者の伝統について対照的な見解を表明している。

「古来和漢ノ学者ハ、孝悌忠信ノ行ハザルベカラザルコトヲ既定的ニ説話セリ。〔……〕古人ハ何事ガ人ノ徳義ナルカラ論弁セリ。〔……〕

共同愛國ノ要ハ、東洋固ヨリ之レアリト雖モ、古来之レヲ説明スルモノ殆ンド稀ナリ。故ニ余ハ今共同愛國モ孝悌忠信ト同ジク徳義ノ大ナルモノタルコトヲ説明セリ（松本三之介編『明治思想集Ⅱ 近代日本思想体系31』（筑摩書房、一九七七年）八六頁。なお、本稿における引用文内の〔 〕は、本文中、脚注中ともに本稿筆者による注であることを意味する。〔……〕は、本稿筆者による中略を意味する。）」

このように彼は、前者は東洋の伝統として古来から受け継がれてきたものであると述べると同時に、後者は必ずしもそうは言い切れないものであるということをも認めた上で、その必要性を主張した。ここに、愛國という伝統が近代において意識的に創造されつつあった痕跡を見ることができる。

10 木下尚江『「新人」の国家宗教』、『直言』二巻二号、1905/02/12、『木下尚江全集』第一七巻、二〇頁。以下同論文からの引用は同書二〇—二四頁。

11 西川長夫『地球時代の民族=文化理論 脱「国民文化」のために』（筑摩書房、一九九五年）二三一—二四頁。

12 酒井直樹『死産される日本語・日本人 「日本」の歴史・地政的配置』（新曜社、一九九六年）一二—一三頁。

13 ツヴェタン・トドロフは普遍主義と自民族中心主義を次のように論じているが、西川の普遍主義は後者に相当するものであろう。

「普遍主義の立場というものは複数の形象をとって現れうる。自民族中心主義はその筆頭に掲げられるだろう。というのも、自民族中心主義は普遍主義の複数の形象のうちもっともありふれたものだからである。ここでこの語に与えられている意味では、自民族中心主義は私が属する社会に固有の価値をむりやりに普遍的価値にまつりあげてしまうことである。自民族中心主義者こそは、言ってみれば、普遍主義者の生まれながらの戯画なのだ。普遍主義者は普遍的なものをもとめて、特殊個別のものから出発し、続いてそれを一般化しようとやっきになるが、この特殊個別のものは当然彼にとって身近なもの、すなわち実際には彼自身の文化の中に見いだされるものということになる。普遍主義者と自民族中心主義者の唯一のちがいは——しかしこのちがいは明らかに決定的なものなのだが——、自民族中心主義者はなるべく努力しないですませようとし、批判的な仕方では事を運ばないという点である。つまり彼は自分の認める価値を絶対のものと信じており、しかもそう信じるだけで事足りりとする。つまりその価値が本当に絶対のものであるかどうかをけって証明しようとはしない。自民族中心主義者ではない普遍主義者（少なくともそうした人間を想像することはできるだろう）であれば、自分がなぜある価値ではなく他の価値を好むのかその好みを理性に根拠づけようとするだろう。自分には普遍的に思われる価値でも、自国に固有の伝統に偶然にも含まれるものについてはとくに注意を払うだろう。そして、他国で見いだされたり、演繹的に導き出されたよりよい解決法があれば、慣れ親しんだり方を決然と捨て去る覚悟はできているだろう。（小野潮・江口修訳『われわれと他者 フランス思想における他者像』（法政大学出版局、二〇〇一年）一八頁）」

14 鈴木健二『ナショナリズムとメディア』（岩波書店、一九九七年）二〇—二四頁参照。「日清戦争の勝利と直後の三国干渉は、新聞をナショナリズムに目覚めさせ、版図拡大の夢を膨らませた。当時あって、『日本』のように軍拡路線に厳しい目を注ぐものもなかったが、大方の新聞は政府の尻を叩いて軍拡を煽った。新聞に『大』の字が目立つようになるのはこの頃である。（一二七—一二八頁）」

15 海老名弾正「日本魂の新意義を想ふ」、『新人』、1905/01、『吉野作造選集』第一巻、三七一頁。以下同論文からの引用は同書三七〇—

三七三頁。

- 16 木下尚江「国家最上権を排す」、『毎日新聞』、1903/09/21、『木下尚江全集』第一六卷、一四七頁。
- 17 この箇所は明らかに聖書の次のような節を踏まえている。「あなたがたによく言うておく。多くの預言者や義人は、あなたがたの起ることを見ようと熱心に願ったが、見ることができず、あなたがたの聞いていることを聞こうとしたが、聞けなかったのである。（『マタイによる福音書』第二章第一七節）」、「あなたがたによく言うておく。女の産んだ者の中で、バプテスマのヨハネより大きい人物は起らなかった。しかし、天国で最も小さい者も、彼よりは大きい。（同、第十一章第一一節）」
- 18 幸徳秋水「新年雑誌瞥見」、週刊『平民新聞』六一号、1905/01/08、『幸徳秋水全集』第八卷（明治文献、一九七二年）、三二九頁。傍点は原文通り。なお、この引用文は幸徳が核心となる文章を全体から抜粋した上で若干調整しているため、海老名の原文の通りではない。以下同論文からの引用は同書三二八—三三一頁。
- 19 「宣戦の詔書」、『官報』号外、1941/12/08、山田朗編『外交資料 近代日本の膨張と侵略』（新日本出版社、一九九七年）三六四頁。
- 20 幸徳秋水「朝鮮併呑論を評す」、週刊『平民新聞』三六号、1904/07/17、『幸徳秋水全集』第五卷（明治文献、一九六八年）、一六九—一七四頁。
- 21 田中惣五郎は、海老名の論を「たんなる優越感ではなく、劣等感をうらがえしにした優越感」の表現であり、「あたかも攘夷思想の根源たる水戸学派の藤田東湖の正気歌に、キリスト教をまぶしかけたごときもので、日露戦争の大勝利に陶醉した感がないでもない」と評している。（『吉野作造』三一書房、一九七一年、五五頁）
- 22 本山幸彦編『近代日本思想体系 5 三宅雪嶺集』（筑摩書房、一九七五年）二二八頁。
ちなみに木下は1905年3月9日付毎日新聞の「戦後思想界の準備」という記事で、「書生の悪戯位に考へられた」「民主社会主義」について次のように書いている。
『書生の空論』とは今も尚ほ社会党に対して大人君子の口より漏るゝ批評なりと雖も、吾人は彼等の閣下に三十年前流行せる俗謡一首を呈上せんと欲する也、
書生々々と軽蔑するな
今の参議は皆な書生
然り、書生の空論は天下の大勢を卜すべき風車に非ずや（『木下尚江全集』第一七卷、四七一—四八頁）」
- 23 吉野作造「国家魂とは何ぞや」、『新人』、1905/02、『吉野作造選集』第一卷、七八頁。以下同論文からの引用は同書七八—八〇頁。
- 24 吉野作造「木下尚江君に答ふ」、『新人』、1905/03、『吉野作造選集』第一卷、八六頁。以下同論文からの引用は同書八一—八九頁。
- 25 「僕は是非とも議会の戦場に雌雄を決せんと熱烈なる希望を抱きぬ、故に選挙権の拡張は当面唯一の事業にてありき、僕は先づ『普通選挙』の大旗を擁して普く国民の間を往来し、以て議会に達するの道を造らざるべからずと思ひ廻らしぬ、故に苟も議会に行くの準備と見ゆるものならんには、其事の何たるを問はず、之を捉ふるに躊躇せざりき、去れば三十五年の夏前橋市の選挙競争に赴きしが如き、昨年の春東京市に議員候補の名を掲げしが如き、何物の愚か其の当選を予期せんや、然れども僕等赤手無産にして多年一日其目的を遂げんと欲する者に在りては、幾度も此の愚妄の冒険を重ねざるべからず（『旧友諸君に告ぐ』、『新紀元』一二号、1905/10/10、『木下尚江全集』第四卷、三五七—三五八頁）」
- 26 木下尚江「婦女ノ生涯」、『松本親睦会雑誌』一四号、1887/07/20、『木下尚江全集』第一二卷、一一頁。
- 27 山室信一「思想課題としてのアジア」（岩波書店、二〇〇一年）四一九頁。
- 28 木下尚江「是れ国家の目的」、『新生活』3号、1908/03/05、『木下尚江全集』第一八卷、五三一—五四頁。

参考文献

- 井口和起『日露戦争の時代』吉川弘文館、一九九八年
井口和起編『近代日本の軌跡 3 日清・日露戦争』吉川弘文館、一九九四年
石坂浩一『近代日本の社会主義と朝鮮』社会評論社、一九九三年
唐木順三、竹内好責任編集『近代日本思想史講座 8 世界のなかの日本』筑摩書房、一九六一年
清水靖久『野生の信徒 木下尚江』九州大学出版会、二〇〇二年
鈴木健二『ナショナリズムとメディア』岩波書店、一九九七年
竹内好『日本とアジア』ちくま学芸文庫、一九九三年
田中惣五郎『吉野作造』三一書房、一九七一年
中野孝次『若き木下尚江』筑摩書房、一九七九年
中村勝範「木下尚江における近代思想の展開——日露戦争前後を中心として」慶應義塾大学法学研究会編『慶應義塾大学法学部法学研究』第二七卷第八号、一九五六年

西川長夫『地球時代の民族=文化理論』筑摩書房、一九九五年

松本三之介『明治思想史』新曜社、一九九六年

松本三之介『明治精神の構造』岩波書店、一九九三年

山室信一『思想課題としてのアジア』岩波書店、二〇〇一年

米原謙『近代日本のアイデンティティと政治』ミネルヴァ書房、二〇〇二年

米原謙『日本政治思想』ミネルヴァ書房、二〇〇七年

Kinoshita Naoe's Critique of "Japanese Spirit"

HARA Yusuke

Abstract:

The Russo-Japanese War (1904-1905) prompted people to think seriously about how Japan should pursue a role as an important actor on the stage of world politics. Kinoshita Naoe, a pacifist and "socialistic Christian," vigorously criticized the nationalism that had been gaining power with the rise of Japan's presence in East Asia. Many nationalists at that time advocated that Japan can and should play some positive role in international affairs in its own manner.

In January 1905, Ebina Danjo, a "nationalistic Christian," published an article in praise of the rapid progress of Japan's national strength. He admired Japan as the "Empire of the Son of God" to come. He declared that, led by "Japanese Spirit," the nation was destined to bring the ultimate solution to the critical situation of East Asia and in turn to that of the whole world. A controversy over "Japanese Spirit" was triggered by Kotoku Shusui, a socialist, who ridiculed it. Adding to the debate, Kinoshita criticized the acclaim for such spirit as encouraging imperialism. He pointed out that, when adherents of spirit talk of state, they overlook the person, which at any time must be the first unit of concern, even in the heat of enthusiasm for the nation.

Keywords: nationalism, Japanese Spirit, the Russo-Japanese War, Kinoshita Naoe, Ebina Danjo